

HP OpenView Performance Agent

for Linux システム

ソフトウェア バージョン : C.04.50

インストール、設定ガイド

2005 年 10 月



ご注意

保証書

当社では、特定用途に対する適合性、市場性などについては、本書に関する一切の保証をいたしかねます。本書の記載内容の誤り、および提供、パフォーマンス、本書の使用に関連して発生する直接損害、間接損害、特別損害、偶発的損害、または派生損害について、当社は責任を負いかねますのでご了承ください。

当社製品に適用される特定の保証書は最寄りの当社営業所から提供しております。

権利の制限

合衆国政府が使用、複製、または開示を行う場合、国防総省については DFARS 252.227-7013 の "Rights in Technical Data and Computer Software" の (c)(1)(ii) に記載されている制限が適用されます。

Hewlett-Packard Company
United States of America

その他の機関については FAR 52.227-19 の (c)(1) および (c)(2) に記載されている制限が適用されます。

著作権

© Copyright 1983-2005 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

当社の書面による承諾なく、本書の内容のコピー、複製、別の言語への翻訳を行うことは禁じられています。本書の内容は将来予告なしに変更することがあります。

商標

UNIX® は、The Open Group の登録商標です。

Adobe®, Acrobat®, および PostScript® は Adobe Systems Incorporated. の商標です。

Motif® は、米国およびその他の国々における Open Software Foundation の登録商標です。

その他の製品名は各社の商標またはサービス マークです。

サポートについて

HP OpenView のサポート専用 Web サイトを参照してください。

<http://www.hp.com/managementsoftware/support>

ここでは、HP OpenView の製品、サービス、サポートに関するお問い合わせ情報が掲載されています。

HP OpenView ソフトウェア サポート オンラインでは、セルフソルブ技術情報検索を利用でき、お客様の業務の管理に必要な対話型の技術支援ツールに素早く効率的にアクセスいただけます。ここでは、次の処理を実行できます。

- 技術情報の検索
- エンハンスメント要求の送信
- ソフトウェア パッチのダウンロード
- サポート ケースの登録とトラッキング
- サポート 契約の管理
- HP サポート連絡先の検索
- 利用可能なサービスの参照
- ユーザー同士のディスカッション
- ソフトウェア トレーニングの検索と登録

ほとんどのサポート エリアについて、アクセスするには HP Passport ユーザーとして登録、ログインする必要があります。また、多くのサポート エリアでサポート契約が必要です。

アクセス レベルに関する詳細は以下を参照してください。

http://www.hp.com/managementsoftware/access_level

HP Passport ID の登録は以下で行うことができます。

<http://www.managementsoftware.hp.com/passport-registration.html>

目次

1	OpenView Performance Agent のインストール	7
	OpenView Performance Agent について	7
	インストール要件	9
	対応しているアーキテクチャおよびオペレーティング システム	9
	ディスク スペース	9
	インストールの手順	11
	アクティブなパフォーマンス ツール プロセスの終了	11
	OV Performance Agent のインストール	12
	Debian での OV Performance Agent のインストール	14
	OV Operations を使用しての OV Performance Agent のインストール	14
	OV Performance Agent の削除	15
2	OV Performance Agent の実行方法	17
	OV Performance Agent の開始と終了	18
	自動的な開始と終了	19
	ステータスの確認方法	20
	ディレクトリのサンプル	20
	ファイアウォールを介した通信	21
	通信に使用するポート	23
	HTTP プロキシを使用する場合	23
	HTTP プロキシを使用しない場合	24
	ファイアウォールを介したポートの設定	24
	OVPA ポートの設定	25
	Reporter および OVPM の設定	26
	その他の留意事項	28
	安全な通信の設定	29

証明書の使用	29
クライアント認証の使用	29
authip ファイルによる認証の有効化	30
authip ファイルのフォーマット	31
データ ソースの設定	32
datasources 設定ファイルのフォーマット	32
データ ソースの削除	33
parm ファイル	34
アラームの定義	35
3 ドキュメント	37
OV Performance Agent ドキュメント一覧	38
Web 上でのドキュメントの参照	39
Adobe Acrobat ファイル	40
用語集	41
索引	47

第 1 章 OpenView Performance Agent のインストール

OpenView Performance Agent について

HP OpenView Performance Agent (OVPA) は、ご使用の Linux system から、パフォーマンス、リソース、およびトランザクション データを取り込みます。また、最小限のシステム リソースを使用して、システム上の現在および過去のリソース データに関するアラーム状態の連続的な収集、要約、タイム スタンプ作成、および検出を行います。ローカル エクスポート機能、または OV Reporter や OV Performance Manager (OVPM) 4.0 以降などの相補的な OpenView 製品を使用して、データを分析することができます。さらに、OV Performance Agent は、OpenView Network Node Manager (NNM) および OpenView Operations (OVO) へのデータ アクセスとアラーム通知機能を備えています。



本書における OV Performance Manager (OVPM) という語は、UNIX および Windows プラットフォーム対応のバージョン 4.0 およびそれ以降のみを指します。OVPM 3.x (PerfView) は、OV Performance Agent for Linux には接続しません。

OV Performance Agent は、データ ソース統合 (DSI: Data Source Integration) 技術を使用して、アプリケーション、データベース、ネットワーク、その他のオペレーティング システムなどの外部データ ソースからデータを受信し、アラーム状態を検出し、ログを記録します。

OVPA によって記録および保存された包括的なシステム パフォーマンス データを使用して、次のような作業が可能となります。

- 環境の作業負荷の特徴づけ
- リソースの使用量と負荷バランスの分析
- 過去のデータの傾向分析とボトルネックの分離および特定
- エラー状態への対応
- トランザクション応答時間に基づいたサービス レベルの管理

- 容量計画の実行
- システム管理問題の事前の解決

OV Performance Agent に関する包括的な説明は、『HP OpenView Performance Agent for UNIX ユーザー マニュアル』を参照してください。

インストール要件

OV Performance Agent をインストールする前に、システムがこのセクションに記されている要件を満たしていることを確認してください。OV Performance Agent が正しく動作するためには、ご使用のシステムが、特定のシステムおよび設定上の前提条件を満たしている必要があります。

対応しているアーキテクチャおよびオペレーティング システム

以下の表は、対応しているアーキテクチャおよびオペレーティング システムのバージョンと、各システムで使用可能なデータ通信プロトコルをリストしたものです。

表 1 対応しているアーキテクチャおよびオペレーティング システムのバージョン

オペレーティング システム	アーキテクチャ	プロトコル
SuSE 8.0 およびそれ以降	x86	HTTP/HTTPS
SuSE 9.0 およびそれ以降	AMD64、EM64T	HTTP
RedHat EL 2.1 および それ以降	x86	HTTP/HTTPS
RedHat EL 3.0 および それ以降	AMD64、EM64T	HTTP
Debian 3.0r2 および それ以降	x86	HTTP/HTTPS
TurboLinux 8.0J	x86	HTTP/HTTPS

ディスク スペース

OV Performance Agent は /opt/perf/ および /opt/OV/ ディレクトリにインストールされます。ログ ファイルとステータス ファイルは /var/opt/perf/ および /var/opt/OV/ ディレクトリに作成されます。

- OV Performance Agent を初めてインストールする場合は、/opt/perf/ および /opt/OV/ ディレクトリに約 50 MB のディスク スペースが必要です。
- OVPA データベースおよびステータス ファイルには、/var/opt/perf/ および /var/opt/OV/ ディレクトリに 125 MB のディスク スペースが必要です。

OV Performance Agent の初回のインストールの際、デフォルトの parm ファイルは、ログ ファイルのデータを最大で約 60 MB まで収集するように設定されています。

parm ファイルを編集して scopeux を再開始することにより、ログ ファイルのサイズを変更できます。parm ファイルの編集、parm ファイルを使用してログ ファイルのデータ記憶領域を制限および構成する方法については、『HP OpenView Performance Agent for UNIX ユーザー マニュアル』の第 2 章を参照してください。

インストールの手順

OV Performance Agent は CD-ROM インストール メディアに収録されています。ドキュメントを含む製品のサイズはおよそ 50 MB です。

OV Performance Agent のインストール手順は 2 つに分けられます。

- 1 OVPA または Glance をすでにシステムにインストールしている場合は、実行中のパフォーマンス ツール プロセスを終了します。
- 2 OV Performance Agent をインストールします。



このバージョンの OV Performance Agent は、OV Operations 8.x エージェントがインストールされた 64 ビット オペレーティング システムの Linux システムにインストールすることはできません。

アクティブなパフォーマンス ツール プロセスの終了

- 1 **root** でログインします。
- 2 次のように入力して perfstat を実行し、アクティブなパフォーマンス ツールがあるかどうかを確認します。

```
/opt/perf/bin/perfstat
```

perfstat によって、アクティブなパフォーマンス ツール プロセスが報告された場合は、そのプロセスを終了します (プロセスを終了する前に、それらのツールを使用していないことを確認してください)。

- 3 以前にインストールしたバージョンの OV Performance Agent が動作中の場合は、次のように入力して終了します。

```
/opt/perf/bin/ovpa stop
```



parm、alarmdef、ttd.conf、datasources などのカスタマイズした設定ファイルやその他のカスタマイズしたログ ファイルは、新しくインストールする際に上書きされることはありません。新しい設定ファイルは /opt/perf/newconfig/ ディレクトリにインストールされます。

- 4 midaemon (measurement interface daemon) が終了していることを、次のように入力して確認します。

```
ps -ef | grep midaemon
```

midaemon がアクティブである場合は、次のように入力して終了します。

```
/opt/perf/bin/midaemon -T
```

- 5 ttd (transaction daemon) が終了していることを、次のように入力して確認します。

```
ps -ef | grep ttd
```

ttd がアクティブである場合は、次のように入力して終了します。

```
/opt/perf/bin/ttd -k
```

- ▶ ttd を終了する場合は、ARM 装備のアプリケーションをすべて終了してから、ttd と OV Performance Agent のプロセスを再開始してください。
- 6 perfstat コマンドを再度実行して、アクティブなパフォーマンス ツールやプロセスがないことを確認します。すべてのツールまたはプロセスを終了し、カスタマイズした設定ファイルをバックアップしたら、インストール プロセスに進みます。

OV Performance Agent のインストール

- ▶ Debian にインストールする場合は、14 ページの「[Debian での OV Performance Agent のインストール](#)」を参照してください。

- 1 **root** でログインしていることを確認します。
- 2 インストール CD-ROM をドライブに挿入します。

通常、Linux システムは、自動的に CD-ROM をマウントするように設定されています。CD-ROM を自動マウントするように設定されていないシステムの場合は、ファイル マネージャを使用するか、または以下のようなコマンドを入力して、手動でマウントする必要があります。

```
mount -t <type> <device> <dir>
```

ここで、<type> はファイル システムのタイプ、<device> は CD-ROM デバイス、<dir> は CD-ROM ディレクトリがマウントされる場所です。次に例を示します。

```
mount -t iso9660 /dev/cdrom /mnt/cdrom
```

- 3 ターミナル ウィンドウを開きます。コマンド ラインから `ovpa.install` スクリプトを実行します。
- 4 ターミナル ウィンドウで次のように入力し、現在の作業ディレクトリを変更します。

```
cd /<directory>
```

ここで、<directory> は、ご使用の CD-ROM ディレクトリです。

- 5 `ls` と入力して、正しいディレクトリに移動しているかどうかを確認します。README ファイル、`ovpa.install` および `glance.install` スクリプト、`paperdocs`、`packages`、および `ReleaseNotes` サブディレクトリが表示されます。
- 6 次のように入力し、インストール スクリプトを実行します。

```
./ovpa.install
```

`ovpa.install` スクリプトには、さらに高度なインストールに用いるコマンド ライン オプションが含まれています。コマンド の構文は次のとおりです。

```
ovpa.install [-n] [-f] [-v]
```

コマンド ライン オプションの意味は以下のとおりです。

- | | |
|-----------------|---|
| <code>-n</code> | インストールの最後に、 <code>ovpa start</code> に関するメッセージを表示しません。 |
| <code>-f</code> | 強制インストール (<code>--force</code> 、 <code>--nodeps</code>) |
| <code>-v</code> | 詳細インストール |

これで、OV Performance Agent のインストールは完了です。

デフォルトでは、OV Performance Agent プロセスはシステムのリブート時に自動的に開始されるように設定されています。18 ページの「[OV Performance Agent の開始と終了](#)」を参照してください。

第 2 章「OV Performance Agent の実行方法」では、ご使用の環境に合わせて OV Performance Agent の設定を行う場合の作業を説明しています。



OV Performance Agent の新機能と変更点についての詳細は、`/opt/perf/ReleaseNotes/OVPA` にあるリリース ノートを参照してください。

Debian での OV Performance Agent のインストール

Debian システムでは、まず最初に /usr/bin/rpm (RedHat Package Manager) をインストールする必要があります (インストールされていない場合)。

OV Performance Agent のインストールには rpm が必要です。

これまでに rpm を使用していない場合は、次の手順を実行します。

- 1 **root** でログインしていることを確認します。
- 2 次のように入力して、rpm データベースを作成します。

```
# mkdir /var/lib/rpm  
# rpm --initdb --dbpath /var/lib/rpm
```

- 3 12 ページの「OV Performance Agent のインストール」の手順 2 ～手順 6 を行います。

OV Operations を使用しての OV Performance Agent のインストール

OV Operations for UNIX 8.x またはそれ以降を使用している場合、管理サーバーから Linux の管理ノードに、OV Performance Agent をインストールすることができます。

OV Operations for UNIX バージョン 8.x でのインストールの方法については、『HP OpenView Operations システム管理リファレンス ガイド』の第 4 章「HP OpenView Performance Agent」を参照してください。



このバージョンの OV Performance Agent は、OV Operations 8.x エージェントがインストールされた Linux 64 ビット オペレーティング システムにインストールすることはできません。

OV Performance Agent の削除

システムから OV Performance Agent を削除する場合は、`/opt/perf/bin/` ディレクトリの `ovpa.remove` スクリプトを実行します。OV Performance Agent を削除する前に、作成されたログ ファイルおよびデータ ファイルを削除するかどうかの確認が、このスクリプトによって行われます。

`ovpa.remove` スクリプトは、次のコマンド ライン オプションを使用することで、柔軟に製品を削除できるようになっています。コマンドのオプションは次のとおりです。

ovpa.remove [-f] [-h] [-r]

-f 強制削除します。製品を削除する際、確認画面を表示しません (非インタラクティブ モード)。

メモ : このオプションは、インストールされている Glance も削除します。

-h ヘルプ : このコマンドの使用に関するメッセージを表示します。

-r OVPA の設定、データ、および製品ファイルを削除します。

メモ : `f` オプションと `r` オプションを共に使用すると、確認画面を表示せずに、インストールされている Glance を含め、すべての製品、設定、およびデータ ファイルを削除します。

他の OpenView 製品でも共有されていて、他のツールの使用に必要な一部の製品パッケージは、システムにインストールされたままになることがあります。ツールがすべて削除された時点で、これらのパッケージも削除されます。

第 2 章 OV Performance Agent の 実行方法

この章では、OV Performance Agent をシステムにインストールした後のプログラムの開始と実行に関する作業について説明します。次のような内容を取り上げます。

- OV Performance Agent の開始と終了
- ファイアウォールを介した通信
- 安全な通信の設定
- データソースの設定
- アラームの定義



データソース統合 (DSI: Data Source Integration) 機能を使用して、他のソースのデータを記録する場合は、『HP OpenView Performance Agent for UNIX データソース統合ガイド』を参照してください。

OV Performance Agent の開始と終了

インストールが完了すると、OV Performance Agent を開始できます。OV Performance Agent の終了、開始、または再開が必要の場合は、ovpa スクリプト を使用して、現在実行中のプロセスを終了または再開してください。

OV Performance Agent とそのプロセスを開始する手順は次のとおりです。

- 1 **root** でログインします。
- 2 以下を入力します。 **/opt/perf/bin/ovpa start**

ovpa start スクリプトは、OV Performance Agent とすべてのプロセスを開始します。開始されるプロセスには、scopeux (データ コレクタ)、midaemon (measurement interface daemon)、tttd (transaction tracking daemon)、coda、ovc、ovbbccb、およびアラーム ジェネレータが含まれます。スクリプトが実行されると、開始されたプロセスのステータスが画面に表示されます。

ovpa スクリプトと適切なオプションを使用することで、動作中の OV Performance Agent プロセスを終了し、再開できます。

- ovpa stop は、tttd (transaction tracking daemon)、ovc、および ovbbccb を除くすべての OV Performance Agent プロセスを終了します。これらのプロセスは常に実行されている必要があります。OpenView Operations エージェントがシステムで実行されている場合、ovpa stop は coda デーモンを終了しません。



tttd を終了する場合は、ARM を装備した動作中のアプリケーションも終了させてから、tttd と OV Performance Agent のプロセスを再開してください。

- ovpa restart server は、coda を終了させ、その後再開します。その際、一時的にアラームが無効になり、OV Performance Manager などのクライアントにアクセスできなくなります。それから、datasources ファイルを再度読み込みます。また、このオプションは、perfalarm プロセスを終了させ、その後、再開させて、alarmdef ファイルを再度読み込みます。
- ovpa restart は、scopeux およびサーバー プロセスを一時的に終了させ、その後、再開させます。このスクリプトにより、parm ファイルが読み込まれると共に、トランザクション デーモンである tttd が設定ファイル tttd.conf を再度読み込みます。
- ovpa restart alarm により、アラーム ジェネレータ プロセスは alarmdef ファイルを再度読み込みます。これにより、このファイルに変更を加えた場合に、すべての OVPA プロセスを再開することなく、新しいアラーム定義を有効にすることができます。この操作は他のプロセスに影響を与えません。

自動的な開始と終了

システムの再起動時に自動で OV Performance Agent を開始するプロセス、およびシステムのシャット ダウン時に OVPA を終了するプロセスは、OVPA 起動およびシャットダウン スクリプトと OVPA 起動設定ファイル により制御されます。このスクリプトと設定ファイルは、ご使用の Linux ディストリビューションに固有の要件によって、以下のように異なります。

	OVPA システム起動および シャットダウン スクリプト	OVPA 起動設定ファイル
Red Hat	/etc/rc.d/init.d/ovpa	/etc/sysconfig/ovpa
SuSE	/etc/init.d/ovpa	/etc/ovpa.conf
TurboLinux	/etc/rc.d/init.d/ovpa	/etc/sysconfig/ovpa
Debian	/etc/init.d/ovpa	/etc/ovpa.conf

OVPA 起動設定ファイルには、システム起動時の OV Performance Agent の動作を制御するさまざまな環境変数が含まれています。このファイルは、OVPA システム起動およびシャットダウン スクリプトのソース ファイルです。

次の環境変数およびシェル変数を編集して、OV Performance Agent のデフォルトの動作を変更することができます。

- OVPA_START は、システムを再開したときの OV Performance Agent の自動開始を制御します。この変数は、以下の値のうちのいずれかをとります。

0

システム起動時に OV Performance Agent を開始しません。

1

システム起動時に OV Performance Agent を開始します。
- OVPA_START_COMMAND は、システムの再起動時に、OV Performance Agent を開始するスクリプト オプションを指定する変数です。通常、この変数は次のように設定されます。

 /opt/perf/bin/ovpa start



OVPA 起動設定ファイルは、OV Performance Agent のパッチの適用時または更新時に上書きされないため、加えた変更はすべて保持されます。

ステータスの確認方法

OV Performance Agent を開始すると、`/var/opt/perf/` および `/var/opt/OV/` ディレクトリに数個のステータス ファイルが作成されます。`perfstat` コマンドを使用して、OV Performance Agent の全プロセスまたは一部のプロセスのステータスを確認できます。

次のステータス ファイルには、OV Performance Agent のプロセスで生じる障害を解決するのに使用される診断情報が含まれます。

```
/var/opt/perf/status.scope  
/var/opt/perf/status.perfalarm  
/var/opt/perf/status.ttd  
/var/opt/perf/status.mi  
/var/opt/OV/log/coda.txt
```

ディレクトリのサンプル

`/opt/perf/examples/` ディレクトリには、設定ファイルや構文の例、および当社のパフォーマンス ツールをカスタマイズするために使用するプログラム ファイルのサンプルが含まれています。たとえば、`/opt/perf/examples/config/` サブディレクトリには、サンプルのアラーム定義と `parm` ファイルのアプリケーション指定パラメータの例が含まれています。詳細は、`/opt/perf/examples/README` ファイルを参照してください。

ファイアウォールを介した通信

一般に、ファイアウォールはあるネットワークと他のネットワークの間のデータの流れをフィルタリングする方法として定義することができます。OV Performance Agent (OVPA) では、クライアントとサーバー アプリケーション間のデータ アクセスに関して、以前からパケットフィルタリング ネットワーク ファイアウォールを介した通信メカニズムに対応していましたが、今回さらに、HTTP ベースの通信インターフェイスに対応しました。OVPA は内部で Black Box Communication (BBC) コンポーネントを用いて、HTTP ベースのデータ通信を実現します。BBC コンポーネントは、HTTP (BBC2) または HTTPS (BBC5) をベースとした、ファイアウォール対応の単一ポートの通信インフラを提供します。HTTP ベースのインターフェイスはプロキシが使用できるため、柔軟で、ポート数が少なくてすみ、ファイアウォールに適しています。

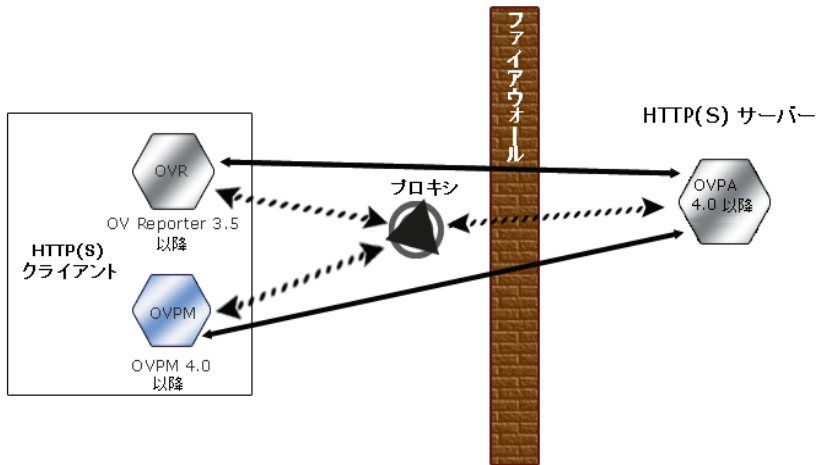
64 ビットの Linux システムでは 通信に BBC 2.0 を使用しますが、32 ビットの Linux システムでは BBC 5.0 を使用します。HTTPS データ通信は、32 ビット Linux システムの OVO 環境においてのみ可能です。

2 つのシステム間にネットワーク ファイアウォールがある場合は、OV Performance Manager および OV Reporter が OV Performance Agent システムからデータを取得します。



本書で使用されている OV Performance Manager (OVPM) という名前は、OVPM バージョン 4.0 以降を指します。OVPM 3.x は、OVPA for Linux システムとは接続できません。

図 1 ファイアウォール環境での OVPA との通信



ファイアウォール環境で HTTP 通信を設定する方法はいくつかあります。HTTP プロキシを使用して、ファイアウォールを介した OVPA データ通信を行うことをお勧めします。この方法では、ご自身の環境ですでによく使用されているプロキシを用いることにより、設定が簡略化されます。プロキシが双方向で使用されている場合、ファイアウォールは正確に 1 つのポートを開く必要があります。

典型的なリモート通信では、ソースポートを使用しているクライアントが、リモートシステムの宛先ポートをリッスンしているサーバーに接続します。ファイアウォールを設定するためには、通信を開始するシステム (クライアント) および通信リクエストを受信するシステム (サーバー) を把握し、それに応じてファイアウォールのルールを設定することが重要です。

図 1 に、OVPA がファイアウォールを介して Reporter (バージョン 3.5 またはそれ以降) および OV Performance Manager (OVPM バージョン 4.0 またはそれ以降) と通信する方法を示します。OVPA は HTTP または HTTPS サーバーです。Reporter および OVPM 4.x は HTTP クライアントです。OVPM 5.0 は HTTP または HTTPS クライアントになることができます。HTTP プロキシを使用する場合、Reporter および OVPM はプロキシを経由して、OVPA と通信します。



Linux をご使用で、OVPM 3.x を OVPM 4.0 またはそれ以降にアップグレードできない場合は、extract プログラムの export 機能を使用して、ローカルで OVPA for Linux のデータにアクセスする必要があります。

通信に使用するポート

OVPA により収集されたデータにアクセスするには、HTTP サーバー (OVPA) 用のポートと HTTP クライアント (Reporter および OVPM) 用のポートが開かれている必要があります。ファイアウォール環境で HTTP クライアントを設定する方法は 2 つあります。HTTP プロキシを使用する方法と使用しない方法です。どちらの場合にも、OVPA ノードからデータにアクセスするには、HTTP サーバー (OVPA) 側のポートが 1 つだけ開いている必要があります。

HTTP プロキシを使用する場合

ファイアウォールを介して通信する場合は、HTTP プロキシの使用をお勧めします。ほとんどの場合にプロキシを使用することで、ファイアウォールが開く必要のあるポートは、プロキシシステム用のより少ない数のポートに限られるため、設定が簡単になります。デフォルトの 383 ポートは変更しないことをお勧めします。

OVPA 用のデフォルト ポート (プロキシ使用) を、表 2 に示します。

表 2 **OVPA デフォルト ポート**

ソース	宛先	プロトコル	ソース ポート	宛先ポート	説明
PROXY	MGD NODE	HTTP	プロキシに より定義	383	通信ブローカー

プロキシを設定するには、BBC 5.0 システムで以下のコマンドを実行します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set PROXY proxy:port+(a)-(b)
```

変数 *a* および変数 *b* は、プロキシに適用するホスト名、ネットワーク、および IP アドレスをコンマで区切った形式のリストです。区切り記号「;」または「,」を使用して、1つの **PROXY** キーに対して複数のプロキシを定義することができます。リストの前の「-」は、それらの要素では対象のプロキシが使用されないことを示し、リストの前の「+」は、それらの要素では対象のプロキシが使用されることを示します。最初に適合したプロキシが使用されます。

次に例を示します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set PROXY srv1.abc.com:8088+
```

BBC 2.0 システムでプロキシを設定するには、`/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt` 設定ファイルを編集します。

`default.txt` ファイルの [DEFAULT] セクションで、PROXY に関連する行を特定し、次のように PROXY パラメータを設定します。

```
PROXY web-proxy.hp.com:8088-(localhost, *.hp.com) + (*)
```

この例では、ローカル マシン (localhost) への要求、および HP 内 (たとえば、**www.hp.com** のような、***.hp.com** に合致するもの) への要求を除いて、web-proxy プロキシが、すべてのサーバー (*) に対してポート 8088 で使用されます。

HTTP プロキシを使用しない場合

HTTP プロキシが利用できない場合は、Reporter および OVPM システム上で、追加の設定が必要になります。27 ページの「[HTTP プロキシを使用しない、Reporter または OVPM の設定](#)」を参照してください。

ファイアウォールを介したポートの設定

以下のガイドラインに従い、ファイアウォール環境での OVPA との通信を設定します。

- クライアントとサーバーのデータの流れるを含む、ファイアウォール環境を把握します。
- ご使用の環境でのポート使用を確認します。
- プロキシ使用時の、ファイアウォールを介した通信設定の詳細については、以下のセクションを参照してください。

— [OVPA ポートの設定](#)

— [Reporter および OVPM の設定](#)

— その他の留意事項

- ファイアウォールを介した通信をテストします。

OVPA ポートの設定

BBC5 を使用している OVPA システムでの設定

BBC5 を使用する OVPA システムでは、デフォルトで BBC 通信ブローカーがポート 383 を使用し、coda は動的に割り当てられたポートを使用します。

以下の手順で、デフォルトの通信ブローカーのポートを設定します。

ovconfchg ツールを使用して、OV Performance Agent システムでのポート設定を変更します。以下のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns bbc.cb.ports -set SERVER_PORT <port number>
```

```
ovc -restart
```

1 つのポートを使用して通信を行うように OVPA を設定するには、以下の手順を実行します。

OV Performance Agent システムでは、coda は動的に割り当てられたポートを使用します。ポート設定を変更して、上で指定した通信ブローカーのポートを使用するには、次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns coda.comm -set SERVER_BIND_ADDR localhost
```

```
ovc -restart
```

BBC2 を使用している OVPA システムでの設定

BBC2 を使用する OVPA システムでは、デフォルトで BBC 通信ブローカーがポート 383 を使用し、coda はポート 381 を使用します。

デフォルト の通信ブローカーのポート を設定するには、以下の手順を実行します。

OVPA システムにおいて、/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt ファイルで [com.hp.openview.bbc.LLBServer] の行を特定し、その下にある SERVER_PORT の値を設定します。次に例を示します。

```
[com.hp.openview.bbc.LLBServer]
```

```
SERVER_PORT = 1386
```

coda ポートを設定するには、以下の手順を実行します。

OVPA システムにおいて、`/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt` ファイルで `[com.hp.openview.Coda]` の行を特定し、その下にある `SERVER_PORT` の値を設定します。次に例を示します。

```
[com.hp.openview.Coda]
```

```
SERVER_PORT = 1387
```

Reporter および OVPM の設定

ファイアウォール環境内の HTTP クライアント (Reporter あるいは OVPM for Windows/UNIX) は、以下のいずれかの方法で設定することができます。

- HTTP プロキシを使用する方法 (推奨)。次の「[HTTP プロキシを用いた、Reporter または OVPM の設定](#)」を参照してください。
- HTTP プロキシを使用しない方法 (非推奨)。「[HTTP プロキシを使用しない、Reporter または OVPM の設定](#)」を参照してください。

HTTP プロキシを用いた、Reporter または OVPM の設定

HTTP プロキシを使用する場合は、Window または UNIX 対応の Reporter および OVPM に対して、OVPA に接続するために使用するプロキシを指定する必要があります。

以下の手順で、OVPM 5.0 を設定します。

次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set PROXY proxy:port+(a)-(b)
```

変数 *a* および変数 *b* は、プロキシに適用するホスト名、ネットワーク、および IP アドレスをコンマで区切った形式のリストです。区切り記号「`;`」または「`,`」を使用して、1 つの PROXY キーに対して複数のプロキシを定義することができます。リストの前の「`-`」は、それらの要素では対象のプロキシが使用されないことを示し、リストの前の「`+`」は、それらの要素では対象のプロキシが使用されることを示します。最初に適合したプロキシが使用されます。

以下の手順で、Reporter または OVPM 4.x を設定します。

`/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt` 設定ファイルを編集します。

`default.txt` ファイルの `[DEFAULT]` セクションで、PROXY に関連する行を特定し、次のように PROXY パラメータを設定します。

PROXY web-proxy.hp.com:8088-(localhost, *.hp.com) + (*)

この例では、ローカル マシン (localhost) への要求、および HP 内 (たとえば、**www.hp.com** のような、*.hp.com に合致するもの) への要求を除いて、プロキシ web-proxy が、すべてのサーバー (*) に対してポート 8088 で使用されます。

HTTP プロキシを使用しない、Reporter または OVPM の設定

ご使用のファイアウォール環境でプロキシが使用できない場合は、HTTP クライアント ポートを直接指定して、ソースおよび宛先に基づくフィルタを適用することができます。

Reporter および OVPM for Windows が同一のシステムにインストールされていて、双方が同時に OVPA にアクセスする場合は、このセクションに記載されているポート範囲を指定します。それらが異なるシステムで実行されている場合は、それぞれに単一のポートを指定することができます。

OVPM 5.0 の設定は、以下の手順で行います。

次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set CLIENT_PORT <port range>
```

ここで、<port range> は、使用するポート範囲です。

次に例を示します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set CLIENT_PORT 14000-14003
```

Reporter または OVPM 4.x の設定は、以下の手順で行います。

/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt ファイルを、以下のよう に編集します。

1 CLIENT_PORT に適用される行を特定して、;CLIENT_PORT = の行をコメント解除します。

2 CLIENT_PORT パラメータに、ポート範囲を指定します。次に例を示します。

```
CLIENT_PORT = <port range>
```

ここで、<port range> は、使用するポート範囲です。次に例を示します。

```
CLIENT_PORT = 14000-14003
```

その他の留意事項

複数の IP アドレスを持つシステムについて

ご使用の環境に、複数のネットワーク インターフェイスおよび IP アドレスを持つシステムがあり、HTTP ベースの通信に専用のインターフェイスを使用する場合は、CLIENT_BIND_ADDR パラメータおよび SERVER_BIND_ADDR パラメータで、使用する IP アドレスを指定することができます。

OVPN システムでは、SERVER_BIND_ADDR パラメータを指定します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set SERVER_BIND_ADDR <IP Address>
```

OVPN 5.0 システムでは、CLIENT_BIND_ADDR パラメータを指定します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set CLIENT_BIND_ADDR <IP Address>
```

Reporter または OVPN 4.x システムでは、CLIENT_BIND_ADDR パラメータを指定します。

/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt ファイルを、以下のように編集します。

- 1 CLIENT_BIND_ADDR に適用される行を特定して、;CLIENT_BIND_ADDR = の行をコメント解除します。
- 2 CLIENT_BIND_ADDR パラメータに、IP アドレスを指定します。

安全な通信の設定

OV Performance Agent は証明書ベースの安全性の高い通信、およびクライアント認証ベースの通信に対応しています。

証明書の使用

OV Performance Agent は、HP OpenView Operations 8.x 環境でのみ、証明書ベースの安全なデータ通信に対応しています。

OVO で安全性の高い通信を設定するには、『HP OpenView Operations for UNIX Firewall Concepts and Configuration Guide』を参照してください。OVO 8.x HTTPS エージェントについての詳細は、『HP OpenView Operations HTTPS Agent Concepts and Configuration Guide』を参照してください。

OVO 8.x 環境ですでに HTTPS 通信を設定している場合は、OV Performance Agent と OVPM 5.0 の間の安全な通信を設定するために、以下の変更を行います。



OV Reporter および OVPM 4.x は証明書ベースの安全性の高い通信には対応していません。

OV Performance Agent システムでは、coda に関して、SSL_SECURITY に REMOTE を設定します。次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns coda -set SSL_SECURITY REMOTE
```

```
ovcodautl -config
```

クライアント認証の使用

オプションとして、OVPM または Reporter などの製品からのクライアント接続の認証を、OV Performance Agent で実行することができます。この認証機能を利用することで、特定の OV Performance Agent インスタンスについて、そのインスタンスへのクライアント接続を許可するホストを指定できます。

クライアント認証機能は、あらゆるバージョンの OVPM および Reporter クライアントからの接続を有効または無効にします。この機能を利用するにあたって、クライアント ソフトウェアを更新する必要はありません。

認証プロセスは、認証されるクライアントに透過的に行われるため、クライアント接続は表面上、OV Performance Agent の過去のバージョンを使用していたときと同じように処理されます。未認証のクライアントには、サービス拒否を示すメッセージが表示されます。

authip ファイルによる認証の有効化

authip というファイルが存在する場合、認証は有効になります。HTTP 通信が有効なシステムでは、authip ファイルは /var/opt/OV/conf/perf/ ディレクトリにあります。authip ファイルにはホストのリストが含まれ、そのホストからのクライアント接続は許可されます。

- authip ファイルが /var/opt/OV/conf/perf/ ディレクトリに存在する場合、クライアント接続が許可されるホストはこのファイルの内容によって決定されます。OV Performance Agent インスタンスとして同じホストで実行されているクライアントは自動的に認証されるため、エントリを必要としません。長さがゼロの authip ファイルは、OV Performance Agent ホストで実行されているクライアントのみが接続できることを意味します。
- authip ファイルが /var/opt/OV/conf/perf/ ディレクトリに存在しない場合 (デフォルト) は、認証は行われず、OV Performance Agent の過去のバージョンと同様に、すべてのクライアントに接続が許可されます。

authip ファイルは、クライアントが OV Performance Agent によるサービスを要求して接続を試みるたびに照会されます。authip ファイルに変更が加えられた場合、変更内容を有効にするために OV Performance Agent を再起動する必要があります。

OV Performance Agent クライアント認証機能では、ご使用のネットワークで authip ファイルのクライアント エントリが解決できる必要があります。エントリの性質によっては、DNS、NIS あるいは /etc/hosts/ ファイルによって提供されるようなネーム サービスを必要とする場合があります。

OV Performance Agent ホストから各 authip エントリへ、「ping」が成功するかを確認することで、これを検証することができます。クライアント認証は、authip ファイル中のクライアント エントリが OV Performance Agent ホストからの ping に応答するという、同様の条件を備えたファイアウォールで機能します。

authip ファイルのフォーマット

authip ファイルは次のフォーマットに一致する必要があります。

- 1 行あたり 1 つのクライアント ホストをリストする
- クライアント エントリ には、次のフォーマット のうち 1 つ (任意) を使用する
 - 完全修飾ドメイン名
 - エイリアス (alias)
 - IP アドレス (ドットで 4 つに区切った IPv4 アドレス)
- クライアント エントリ にはスペースは使用できない
- 行の始めが「#」のラインは、コメントとして無視される
- ブランクあるいは長さがゼロの行は無視される
- IP アドレスは 0 から始めない。たとえば、IP アドレス 23.10.10.10 を 023.10.10.10 と表すことはできない

/etc/hosts エントリは次のようになります。

```
123.456.789.1 testbox testbox.group1.thecompany.com
```

authip ファイル内で次のいずれかのエントリを使用することで、「testbox」ホストからのクライアント接続が可能となります。

```
#===== Examples of authip file entries =====
#
# Use of an IP address
123.456.789.1

#
# Use of an alias
testbox

#
# Use of a fully qualified domain name
testbox.group1.thecompany.com

#===== End of examples of authip file entries =====
```

データ ソースの設定

OV Performance Agent は、coda デーモンを使用して、収集したデータをアラームジェネレータおよび分析製品に送信します。各データ ソースには、1 つのログファイルセットが含まれます。coda がアクセスするデータ ソースのリストは、`/var/opt/OV/conf/perf/` ディレクトリにある `datasources` 設定ファイルで管理されます。インストール後、初めて OV Performance Agent を実行する際には、デフォルトのデータ ソースである **SCOPE** が事前に設定されており、アクティブな `scopeux` ログファイルセットへのアクセスが提供されます。

他のデータ ソースを追加する場合は、`datasources` ファイルでそれらを設定することができます。その後、OV Performance Agent を再開始すると、coda デーモンにより `datasources` ファイルが読み込まれ、検出された各データ ソースの分析ツールへの通信リンクを経由して、データが利用可能になります。

datasources 設定ファイルのフォーマット

`datasources` 設定ファイルの各エントリは、1 つの ログ ファイル セットで構成されるデータ ソースを示します。エントリは、データ ソースの名前とパスを示します。このフィールドでは、ログ ファイルのパス名以外は大文字小文字の区別はありません。構文は次のようになります。

datasource=datasource_name logfile=logfile_set

- **datasource** はキーワードです。**datasource_name** はデータ ソースを識別するための名前です。たとえば、データ ソース名はアラーム定義や分析ソフトウェアで使用されます。また、固有の名前である必要があります。これらの名前は大文字に変換されます。さらに、データ ソース名は最大 64 文字まで指定できます。
- **logfile** はキーワードです。また、**logfile_set** はログ ファイル (`dsilog` または `scope` プロセスにより作成され、`.log` で終わるファイル) を識別する完全修飾名で、大文字小文字の区別があります。

以下に `datasources` ファイルのデータ ソース エントリの例を 2 つ示します。

```
datasource=SCOPE logfile=/var/opt/perf/datafiles/logglob
datasource=ASTEX logfile=/tmp/dsidemo/log/astex/ASTEX_SDL
```


datasources の更新後、ovpa restart server コマンドを使用して、coda デーモンを再開始します。まず、ovpa restart server により、すべての coda プロセスが終了されます。次に、coda デーモンが開始され、datasources ファイルを再読み込みして、このファイルに加えられた変更内容を取り込みます。

coda デーモン プロセスを終了すると、OV Performance Manager の現行の接続がすべて切断されることに注意してください。たとえば、データ ソースでグラフを描いていて、さらに別のグラフを描く場合には、coda デーモンが再起動されたときに、OV Performance Manager のデータ ソースを再選択して、接続を確立する必要があります。

/var/opt/OV/log/coda.txt ファイルの内容を見て、coda デーモンがアクティブ化されたかどうか、およびエラーメッセージがないかどうかを確認します。

データ ソースの削除

OV Performance Manager からのログ ファイル データを表示したり、またはログ ファイルのアラームを処理したりする必要がない場合は、OV Performance Agent 設定ディレクトリ /var/opt/OV/conf/perf/ の datasources ファイルを編集して、データ ソースやログ ファイル セットへのパスを削除することができます。その後、ovpa プログラムを実行して、前出の「[データ ソースの設定](#)」の手順で coda デーモンを再開始します。

データが必要ではなくなったときには、ログ ファイル セットを削除することもできます。datasources から、データ ソースは削除せずに、ログ ファイル セットを削除すると、coda により、そのデータ ソースは省略されます。

データのログ ファイル セットへの記録を停止する際に、coda デーモンを開いたままにしておくことが可能です。これにより、OV Performance Manager で履歴データを表示することができます。この場合は、datasources ファイルからデータ ソースを削除せずに、dsilog プロセスを停止します。

parm ファイル

parm ファイルはテキスト ファイルです。ログ ファイルの最大サイズや対象プロセスのしきい値の定義、アプリケーション定義といった scopeux データ コレクタの設定を指定します。ファイル中のコメントで、各種設定の概要を確認することができます。

OV Performance Agent では、parm ファイルは /opt/perf/newconfig/ ディレクトリに存在し、インストール時に /var/opt/perf/ ディレクトリにコピーされます。parm ファイルとそのパラメータに関する詳細は、『HP OpenView Performance Agent for UNIX ユーザー マニュアル』の第 2 章「parm ファイル」を参照してください。

アラームの定義

パフォーマンスをモニタするためにアラームを使用する場合、OV Performance Agent の alarmdef ファイルにあるアラーム定義セット内でアラーム発生条件を指定します。OV Performance Agent を初めてインストールした場合、alarmdef ファイルにはデフォルトのアラーム定義セットが含まれています。このデフォルトの定義を使用するか、または必要な場合はカスタマイズすることが可能です。

アラームを定義する手順については、『HP OpenView Performance Agent for UNIX ユーザー マニュアル』の「パフォーマンス アラーム」の章を参照してください。この章では、アラーム定義の構文、アラームの機能、パフォーマンスをモニタするためのアラームの使用方法についても説明しています。

第 3 章 ドキュメント

この章では、以下のトピックに関する OV Performance Agent のオンラインおよび印刷可能なドキュメントについて記載します。

- [OV Performance Agent ドキュメント一覧](#)
- [Web 上でのドキュメントの参照](#)
- [Adobe Acrobat ファイル](#)

OV Performance Agent ドキュメント一覧

OV Performance Agent ソフトウェアには、表示可能なファイルフォーマットと印刷可能なファイルフォーマットで設定される標準の OV Performance Agent ドキュメント一式が含まれています。Adobe Acrobat フォーマット (*.pdf) のドキュメントはオンラインで表示され、必要な場合は印刷が可能です。ASCII テキスト (*.txt) のドキュメントも印刷できます。ただし、vi などの UNIX テキストエディタを使用すると、画面上でテキストファイルが表示できます。次の表で、ドキュメント、使用されているファイル名、およびオンラインのパスを示します。

表 3 OV Performance Agent ドキュメント一覧

ドキュメント	ファイル名	パス
HP OpenView Performance Agent for Linux インストール、構成ガイド	ovpainst.pdf	/opt/perf/ paperdocs/ovpa/C
HP OpenView Performance Agent for UNIX ユーザー マニュアル	ovpausers.pdf	/opt/perf/ paperdocs/ovpa/C
HP OpenView Performance Agent for UNIX データ ソース統合ガイド	ovpadsi.pdf	/opt/perf/ paperdocs/ovpa/C
HP OpenView Performance Agent for UNIX および GlancePlus トランザクション追跡	tyt.pdf	/opt/perf/ paperdocs/arm/C
アプリケーション応答測定 API ガイド	armapi.pdf	/opt/perf/ paperdocs/arm/C
HP OpenView Performance Agent for Linux Metric Definitions	metlinux.txt metlinux.htm	/opt/perf/ paperdocs/ovpa/C
OVPA metrics list by Data Class for all operating systems	mettable.txt	/opt/perf/ paperdocs/ovpa/C

Web 上でのドキュメントの参照

ここにリストしている .pdf および .htm ドキュメントは、以下の HP OpenView マニュアルの Web サイトでも参照できます。

http://ovweb.external.hp.com/lpe/doc_serv

製品リスト ボックスから **Performance Agent** を選択し、リリース バージョン、OS、およびマニュアルのタイトルを選択します。**[Open]** をクリックして、オンラインでドキュメントを表示します。または **[Download]** をクリックして、ご使用のコンピュータにファイルをダウンロードします。

Adobe Acrobat ファイル

Adobe Acrobat ファイルは、Acrobat 7.0 で作成されました。表示する場合は、Adobe Acrobat Reader バージョン 4.0 以降を使用してください。Web ブラウザに Acrobat Reader がインストールされていない場合は、Adobe の Web サイトからダウンロードできます。

<http://www.adobe.com>

Acrobat Reader でドキュメントを表示している間は、1 ページ、複数ページ、または全ページ分のドキュメントを印刷できます。

Linux で .PDF ファイルを表示するには、次のように入力します。

`acroread filename.pdf`

用語集

alarmdef ファイル

アラームの状態を特定するアラーム定義を含むファイルです。

coda デーモン

収集したデータをアラーム ジェネレータや scopeux ログ ファイルまたは DSI ログ ファイルを含むデータ ソースの分析製品に提供するデーモンです。coda は detasources 設定ファイルにリストされているデータ ソースから、データを読み込みます。

datasources 設定ファイル

/var/opt/OV/conf/perf/ ディレクトリにある設定ファイルです。ファイル内の各エントリは単一のログ ファイル セットから成る scopeux または DSI データ ソースを示しています。

datasources ファイル

/var/opt/OV/conf/perf/ ディレクトリにある設定ファイルです。ファイル内の各エントリは単一のログ ファイル セットから成る scopeux または DSI データ ソースを示しています。「**perflbd.rc**」、「**coda**」、および「**データ ソース**」も参照してください。

default.txt

HP OpenView アプリケーションで通信パラメータをカスタマイズするために使用する通信設定ファイルです。

DSI

「**データ ソース統合 (DIS)**」を参照してください。

DSI ログ ファイル

OV Performance Agent の DSI プログラムによって作成される、自己記述型のデータを含むログ ファイルです。

extract

OV Performance Agent のプログラムの 1 つで、生のログ ファイルまたは事前に抽出したログ ファイルからデータを抽出 (コピー) し、抽出ログ ファイルに書き込みます。また、分析プログラムで使用するために、データを書き出すことができます。

Glance

Glance (GlancePlus) は、ユーザー端末やワークステーションに現在のパフォーマンス データを直接表示するオンラインの診断ツールです。システムのパフォーマンス障害が発生した場合は、障害の識別と解決の支援ツールとして機能します。

logappl

ユーザーが定義した各アプリケーションのプロセスの測定値を含む生ログ ファイルです。

logdev

ディスクや netif などの個別デバイスのパフォーマンスの測定値を含む生ログ ファイルです。

logglob

システム全体の作業負荷、つまりグローバルな作業負荷の測定値を含む生ログ ファイルです。

logindx

他のログ ファイルに含まれるデータにアクセスする際に必要となる追加情報を含む生ログ ファイルです。

logproc

選択された「対象プロセス」の測定値を含む生ログ ファイルです。プロセスが初めて作成されたとき、プロセスが終了したとき、および CPU 使用量、ディスク使用量、応答時間などに対してユーザーが定義したしきい値を超えたときに、プロセスは「対象プロセス」となります。

logtran

トランザクション データの測定値を含む生ログ ファイルです。

midaemon

トレース データを、メモリ ベースの MI パフォーマンス データベースを使用してカウンタを保持する Measurement Interface カウンタ データに変換する、OV Performance Agent プログラムです。このデータベースは、scopeux のようなコレクタ プログラムによりアクセスされます。

ovpa スクリプト

scopeux データ コレクタ、アラーム ジェネレータ、ttd、midaemon、および coda などの OV Performance Agent のプロセスを開始、終了、再開始するオプションを含んだ OV Performance Agent スクリプトです。ovpa の **man** ページも参照してください。

OV Performance Manager (OVPM)

マルチベンダー分散型ネットワーク システムの統合型パフォーマンス管理を提供します。1 台のワークステーションを使用して、数十から数千のノード サイズに及ぶネットワーク上の環境パフォーマンスをモニタします。

parm ファイル

データ収集方法をカスタマイズするために、scopeux により使用されるパラメータを含む OV Performance Agent のファイルです。

perflbd.rc

/var/opt/perf/ ディレクトリにある設定ファイルです。このファイルは、datasources ファイルへのシンボリック リンクとして管理されます。「**datasources ファイル**」も参照してください。

perfstat

システムにインストールされたパフォーマンス プロセスの全ステータスを表示するプログラムです。

run ファイル

scopeux プロセスが動作中であることを示すために、scopeux コレクタによって作成されます。run ファイルを削除すると scopeux は終了します。

scopeux

パフォーマンス データを収集した後、分析または記録用として生ログ ファイルにデータを書き込む (記録する) OV Performance Agent データ収集プログラムです。「**生ログ ファイル**」も参照してください。

scopeux ログ ファイル

「生ログ ファイル」を参照してください。

status.scope ファイル

ステータス、データの不整合、およびエラーを記録するために、scopeux コレクタによって作成されます。

ttd.conf

トランザクション名、パフォーマンス分布範囲、サービス レベルの目標など、各トランザクションおよび追跡される情報を定義するトランザクション設定ファイルです。

utility

OV Performance Agent のプログラムの 1 つで、生ログ ファイルと抽出ログ ファイルのオープン、リサイズ (サイズ変更)、スキャン、およびレポート作成を可能にします。このプログラムを使用すると、parm ファイルと alarmdef ファイルの構文が確認でき、過去のログ ファイル データのアラーム情報が取得できます。

アプリケーション

関連のプロセスまたはプログラム ファイルのユーザー定義グループです。アプリケーションは、パフォーマンス ソフトウェアがパフォーマンス メトリックを収集し、プロセスおよびプログラムのアクティビティを一括して報告できるように定義されます。

アプリケーション ログ ファイル

「logappl」を参照してください。

アラーム

パフォーマンスがユーザー指定のアラームの基準に一致した時間、またはその基準を超えた時間を意味します。アラーム情報は、OVPM などの分析システムや OVO に送信されます。utility プログラムを使用すると、過去のデータ ログ ファイルでアラームを識別できます。

アラーム ジェネレータ

各アラーム情報間の通信を処理します。これは、perfalarm および agdb データベースで構成されます。agdb データベースは、アラームが送信される OV Performance Manager 分析ノード (存在する場合) のリスト、およびアラーム情報が送信される時間と場所を定義するために必要な各種の on または off フラグで構成されます。

グローバル

システム全体を意味する修飾子です。

グローバル ログ ファイル

「logglob」を参照してください。

システム識別番号

システムを識別する文字列です。デフォルトは `uname -n` で返されるホスト名です。

対象プロセス

プロセスが初めて作成されたとき、プロセスが終了したとき、および CPU 使用量、ディスク使用量、応答時間などに対してユーザーが定義したしきい値を超えたときに、プロセスは「対象プロセス」となります。

抽出ログ ファイル

extract プログラムによって作成されるログ ファイルです。ユーザーが選択したデータの範囲とデータ型を含みます。抽出ログ ファイルは、ワークステーションの分析ツール、OVPM により最適アクセスが可能になるようにフォーマットされています。このファイルのフォーマットは、extract プログラムと utility プログラムへの入力に最適であり、パフォーマンス データのアーカイブにも適しています。

データ ソース

単一の scopeux または DSI ログ ファイル セット内の 1 つ以上のデータ クラスで構成されます。たとえば、OV Performance Agent の SCOPE データ ソースはグローバルなデータから成る scopeux ログ ファイル セットです。「**datasources ファイル**」も参照してください。

データ ソース統合 (DSI)

OV Performance Agent がアプリケーション、データベース、ネットワーク、他のオペレーティング システムなどの外部ソースからデータを受信し、記録して、アラームを検出することを可能にする技術です。

デバイス

システムに接続されている入出力デバイスです。ディスク ドライブ、テープ ドライブ、CD-ROM ドライブ、プリンタ、ユーザー端末などは共通デバイスです。

デバイス ログ ファイル

「logdev」を参照してください。

トランザクション追跡

情報技術 (IT) のリソース マネージャによるビジネス アプリケーション トランザクションのエンドツーエンドの応答時間の測定を可能にする、OV Performance Agent で使用されている技術です。

トランザクション ログ ファイル

「logtran」を参照してください。

生ログ ファイル

scopeux が収集するシステム データの要約された測定値を含むファイルです。「logappl」、「logproc」、「logdev」、「logtran」、および「logindx」を参照してください。

プロセス

プログラム ファイルを実行します。対話型のユーザー (normal、nice または realtime のいずれかの優先順位で実行中のプロセス) またはオペレーティング システムのプロセスを示します。

プロセス ログ ファイル

「logproc」を参照してください。

リアルタイム

イベントが発生する実際の時間です。

リサイズ

utility プログラムの resize コマンドを使用して、ログ ファイル全体のサイズを変更します。

ログ ファイル セット

単一のソースから収集されたデータからなるファイルの集まりです。

索引

A

authip ファイル , 30
 フォーマット , 31
 例 , 31

C

coda.log ファイル , 33
coda デーモン , 32, 33

D

datasources 設定ファイル , 32
 フォーマット , 32
DSI データ ソース , 32

E

extract プログラム , 32

H

HTTP
 クライアント , 23
 プロキシ , 22

O

OV Operations
 OVPA のインストールに使用 , 14

OVPA

 インストール , 12, 14
 開始 , 18
 開始と終了 , 18
 起動設定ファイル , 19
 削除 , 15
 システム起動およびシャットダウン スクリプト , 19
 終了 , 11
 スクリプト , 18
 ステータス ファイル , 20

ovpa.install スクリプト , 13

OVPA_START_COMMAND 変数 , 19

OVPA_START 変数 , 19

ovpa restart スクリプト , 18

ovpa stop スクリプト , 11

ovpa スクリプト
 ovpa start, 18

OVPA の開始と終了 , 18

OVPA の削除 , 15

OVPA の終了 , 11

OV Performance Agent

 OVO を使用したインストール , 14

OVPM

- ファイアウォール通信用の HTTP プロキシを使用しない設定, 27
- ファイアウォール通信用の HTTP プロキシを使用する設定, 26

P

- parm ファイル, 34
- perfstat コマンド, 11

R

Reporter

- ファイアウォール通信用の HTTP プロキシを使用する設定, 26, 27

S

scopeux

- 開始, 18
- データ ソース, 32

scopeux ログ ファイル セット, 32

SCOPE デフォルト データ ソース, 32

あ

- アラーム ジェネレータ、開始, 18

い

- 印刷可能なドキュメント ファイル, 38

インストール

- OVPA, 12, 14
- 手順, 11
- 要件, 9

インストールの手順

- OVO を使用した OVPA のインストール, 14

- インストール前にプロセスを終了, 11

か

開始

- OVPA, 18
- scopeux, 18

- 環境変数, 19

く

- クライアント 認証, 30
- クライアント、ファイアウォール, 22

さ

- サーバー、ファイアウォール, 22

す

スクリプト

- ovpa.install, 13
- ovpa.remove, 15
- ovpa restart alarm, 18
- ovpa stop, 18
- OVPA システム起動およびシャットダウン, 19

ステータス ファイル, 20

- coda.log, 20
- status.mi, 20
- status.perfalarm, 20
- status.scope, 20
- status.ttd, 20

せ

- 設定, 32
- データ ソース, 32

て

- ディスク スペース、要件, 9

ディレクトリのサンプル
README, 20

データ ソース, 32
 DSI, 32
 SCOPE, 32
 scopeux, 32
 SCOPE デフォルト データ ソース, 32
 削除, 33

データ ソースの削除, 33

と

ドキュメント, 37
 Adobe Acrobat ファイル, 40
 OVPA ドキュメント一覧, 38
 Web で参照, 38

ふ

ファイアウォール
 OVPA との通信用デフォルト ポート, 23
 HTTP プロキシを使用しない、Reporter ま
 たは OVPM の設定, 27
 HTTP プロキシを使用する、Reporter また
 は OVPM の設定, 26
 OVPA 通信設定の概要, 24
 クライアント, 22
 サーバー, 22
 ファイアウォールを介した通信, 21
 複数の IP アドレスを持つシステム, 28

ファイアウォール、通信, 21

ファイル
 Adobe Acrobat, 40
 authip, 30
 coda.log, 33
 datasources, 32
 OVPA 起動設定, 19
 parm, 34
 status.scope, 20

プロキシ、HTTP, 22

へ

変数, 19
 OVPA_START, 19
 OVPA_START_COMMAND, 19
 環境, 19

